

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.17 平成元年10月31日



No.107- B 遺跡木器類出土状況

文字資料は何を語る
No.107 B 遺跡

遺跡の周辺には、郷戸、宮郷、郷倉などの古い地名が残存し、遺跡本体は、臺と呼ばれている。

台地上には、先土器、縄文、奈良・平安時代の遺構に加え、大石氏館と思われる四角に囲む濠もあり、縄文中期の墓壙群と共に多大な発見があった。北側は大栗川が蛇行し、南側は通称鮎道といわれる深い支谷が西へ入り込み、立地は、東西に長く伸びる舌状台地を形成している。湧水を伴う低地に写真のごとく、よもやこれほど多くの木製品が残存しているとは考えてもいなかった。

弓、鞍を含む木製品は、盆が最も多く、官・全等の焼印、板片の呪術的文字、さらに坏の墨書など、多くの文字資料を検出した。台地上の掘立て柱建物との関連から、遺跡の性格を早急に解明したいと考えている。

(石井則孝)

遺跡だより⑭

—多摩ニュータウンNo.107B遺跡—



水場遺構検出状況

いように工夫されています。この水場が使用された時期については、出土する須恵器などから奈良時代後半から平安時代初頭にかけての遺構と考えられ、ほぼ同時期の建物や住居跡がNo.107A遺跡で発見されていることから、その人達の生活用水が、ここで賄われていたと思われる。

今回は八王子市松木地区のNo.107B遺跡を紹介します。本遺跡は、本誌No.15で紹介されたNo.107A遺跡の南側谷部にあり、前述の遺跡に関連した様々な遺構や遺物が検出されています。

その中から今回は、最近の調査で多くの須恵器・木製品などが発見された古代の水場の遺構について紹介します。

この水溜の遺構は、No.107A遺跡の南側斜面の裾部に位置し、湧き水を自然の木や板材・杭を使って閉止めたもので、底に板を敷いたり、大きな蒸籠（蒸器）を沈めるなどして水が濁らな

次に出土遺物について見ると、水溜のような低湿地では樹木などの有機物が残りやすく、ここでもモモ・トチ・ムクロジなどの木の実・昆虫・貝の遺骸が検出され、当時の生活環境を物語っています。

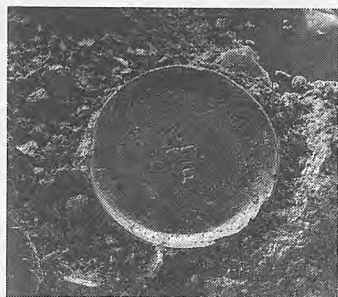
また、直接生活に関する遺物として須恵器・土師器の坏・蓋・碗の他に、ロクロで削りだした白木の皿・碗・盤・蓋（挽物）、蒸籠・桶・ワツパ（曲げ物）、木槽（刳物）、ザル（織物）などの容器類や櫛・弓・鞍・建築材などが出土しており、日常生活の中で果たした木製品の役割が大きかったこ

とが伺えます。

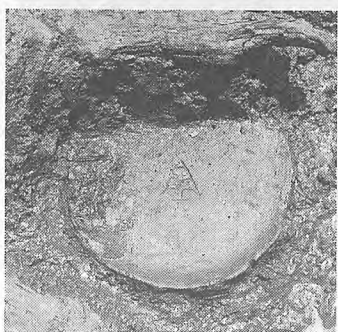
さらに、ここで注目したのは、これらの出土遺物の中で、主に須恵器・土師器・木製の容器類の多くには、その用途や所有者に関わると思われる記号や文字が記されていることです。

それは、須恵器・土師器には墨で位・全・益・田・厶・。が書かれ、木皿には焼印で全・官・。、線刻で位・。が記されたもので、「官」や「位」が示すように、その所有者が高い地位にあつたことが伺えます。今後これらの文字や記号などの分析を進めれば、当時の生活様式の一部がわかってくるかもしれません。

（竹花宏之）



官の焼印をもつ木皿



全の焼印をもつ木皿



全の墨書 須恵器



木製品 出土状況

遺跡だより⑮

—多摩ニュータウンNo.211遺跡—



空堀の土層断面

今回紹介するNo.211遺跡は町田市小山町に所在し、調査の結果、城跡であることが確認された遺跡です。遺跡は、多摩丘陵の南西部に位置し、通称「戦車道路」と呼ばれる尾根道を境に相模野台地に延びた尾根の一つに立地しています。調査は、相原・小山地区の区画整理事業に伴う工事に先立ち、今年の四月から十月中旬まで行ないました。確認された城郭は山城と呼ばれるもので、急崖や深く抉り込まれた谷などの自然地形を巧みに利用し、尾根上の平坦面に郭を築いています。谷底との比高差

は、約35mあります。

郭とは、城の一区画のことをいいます。調査の対象範囲内では、南北に並列して二つの郭が存在します。

北側郭は、内郭の規模が東西幅約75m、南北幅約15mで、南側・西側の斜面で人工的な成形の痕がよく認められます。また北西部には、一段低い位置に腰郭的施設があります。

南側郭は、全体の約1/4の調査ですが、二重の空堀をもつ郭です。内郭の規模は東西幅約20m、南北幅約60mで、南北両辺に土塁状の高まりが認められます。

また内郭の平坦部は、堀を掘った土を盛土し、有効な活動面を確保していることがわかりました。

堀は、上端幅約2〜3mで下端幅0.8mを測り、断面逆台形のいわゆる箱薬研堀の形状をもちます。堀の底面は北から南へ向け傾斜し、郭上部から内堀の底までの最大比高差は約7mもあります。外堀の北西端には、

掘り残しの部分があります。それは城内部への通路部分で、土橋といわれています。

外堀と内堀に挟まれた部分は、帯郭と呼ばれ、幅約2.5mの平坦面を形作り内郭を取り囲んでいます。これは通路および防御の施設と考えられ、南北両郭ともに東側の斜面は、手を加えてはいませんが急崖である自然地形を、ほぼそのまま利用していると思われます。

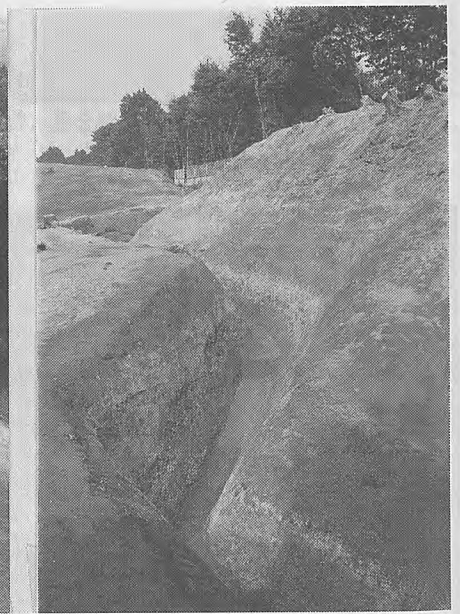
この山城の城域が、この二つの郭で終結するか否かは不明ですが、更に南側につづく尾根筋にも興味を持たれるところです。

文献上では、「多摩郡小山村誌」に城山の伝承が記載され、それを受けて「町田市史」では、鎌倉時代初期の土豪小山太郎有高の時代を推定しています。

ただ、今回の調査では、確実な城の年代を示す資料は得られていませんが、山城の形態・規模などから中世初期まで遡るのは困難と思われます。(石崎俊哉)



南側郭(北より)

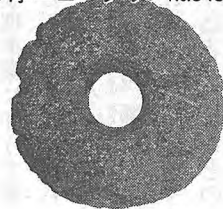


南側郭内堀(南より)

↑土橋部分

遺跡だより⑬

—多摩ニュータウンNo.345遺跡—



環状石斧

今回は、今年の5月から7月にかけて発掘調査を行なった町田市小山町のNo.345遺跡を紹介いたします。

遺跡は多摩ニュータウン区域の西南端、通称「相原・小山」地区にあり、標高128～137mで丘陵縁辺部に位置します。遺跡の西側と南側には、境川に連なる谷が入り込み、近年まで水田が作られていました。

さて、本遺跡から発見された遺構・遺物のうち、主なものとしては、

一、先土器時代の黒曜石製 搔器と剥片

二、縄文時代の土坑

三、弥生時代中期後葉の住

居跡2軒

四、古墳時代前期の住居跡

1軒

などが挙げられます。

これらのうち、弥生時代中期の住居跡は、多摩ニュータウンでは新しい発見例で、非常に注目されます。

ここでは、特に、遺物が豊富に出土した第1号住居跡を中心に説明してゆくことにします。

住居跡は、西側谷部を見下ろす高台に営まれていました。写真に見られるように、斜面側の約半分が失われているため、正確な規模は捉えられないのですが、一辺が約5mの隅丸方形と考えられます。床面は硬く踏み固められており、壁ぎわに周溝といわれる細い溝が掘られています。柱穴は発見されませんが、火を焚いた跡と考えられる炉跡と貯蔵穴と思われる円形のピットが検出されています。

また、床面上には、厚さ約20cmの焼土が広い範囲に分布していることから、火災



第1号住居跡全景（西より）



遺物出土状況（甕）

にあつて焼失した住居と考えられています。床面に密着して、多量の土器が出土していますので、あるいは、突然の火災のために何も持ち出せずに逃げてしまったのかも知れません。土器の内訳は、壺3、甕2、鉢1となっています。

石器は関東地方全域でも出土数の少ない環状石斧と

住居跡から出土することの稀な管玉が、各1点ずつ出土しました。環状石斧は直径11.7cm、中央孔径3.6cmで、石材は多孔質安山岩です。全体を磨いて仕上げ、周縁を薄くして刃の部分を作り出していますが、鋭くはありません。

この第1号住居跡の作られた弥生時代中期という時

期は、関東地方に稲作の技術が伝えられ、水田が営なまれ始めた時代だといわれています。谷をへだてた対岸のNo.926遺跡にも同時期の住居跡が2軒発見されていますので、この地域でも、ようやく稲作を始めた頃の人々の生活の様子が明らかになろうとしています。

（先行調査室 千田利明）

文化財講座 <13>
縄文時代と人々 (1)

多摩ニュータウン出土の「トロトロ」石器

私たち研究者仲間の間で「トロトロ」と呼ばれている石器が、多摩ニュータウン地域内から4点出土しています。正しくは異形局部磨製石器と言いますが、石器がよく磨かれていますから「トロトロ」という愛称が付けられたようです。

これまでの調査や研究によって、縄文時代の初めの頃、なかでも早期の押型文土器と呼ばれる土器が盛んに使われていた時期の石器と考えられています。

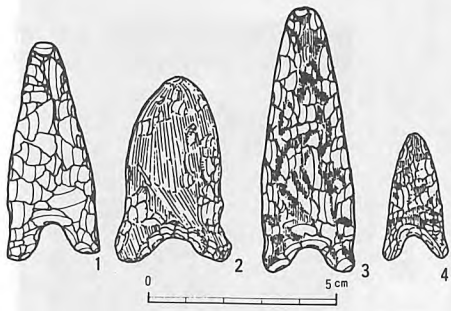
この石器をくわしく研究した千葉大学の岡本東三さんによると、出土した遺跡の数は全国で57ヶ所、石器の点数は101点にのぼるそうです。関東地方では神奈川・千葉・茨城の各県からそれぞれ1点の出土例が取り上げられています。

今回紹介する4点は、岡本さんの研究が発表された後には入っていませんが、今回の4点を加えても関東地方全域でわずか7点しか発見されていない、極めて珍しい、貴重な資料と云うことができます。

この石器がなぜトロトロ石器と呼ばれるようになったかについては、すでに説明しましたが、この石器のもう一つの特徴は、形が石鏃に似ていて、しかも石材がチャートという硬い石にほぼ限られているというところにあります。

ここに図で示した石器は多摩ニュータウン地域内から出土した4点のトロトロ石器を集めたものですが、大きさに違いこそあれ、それぞれよく似た形をしています。1は稲城市坂浜のNo.383遺跡、2は八王子市松木のNo.674遺跡、3は八王子市上柚木のNo.813遺跡、4は八王子市下柚木のNo.632遺跡から、それぞれ出土したものです。

ところで、この石器がどのように使われたかについては、大きく分けて二つの異なる考え方があります。一つは押型文土器の施工を刻む為に使った工具ではないかというもので、今一つは、まじないなどの呪術に使ったものではないかというものです。いずれにしても検討すべき課題が多く、今後の研究に期待の寄せられる石器の一つといえるようです。(原川雄二)



「トロトロ」石器実測図 (1/2)

来館者の声

「石灰華段丘」について

当センターの「遺跡庭園」へ昇る階段上り口の左右を見て下さい。写真のような一風変わった模様を見ることが出来ます。

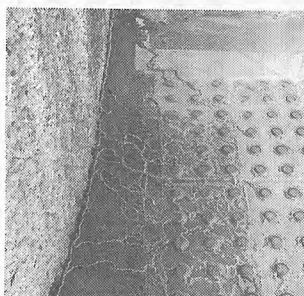
この模様(地形)は、山口県の秋吉洞などで見ることが出来ますが、鐘乳皿とか百枚皿と呼ばれる「石灰華段丘」という地形です。当センターの石灰華段丘の規模はとても小さいのですが、形はともみごとです。

これらの地形は、鐘乳洞の中だけはなく、石灰岩の泉が地表に流れ出したところにも作られることがあります。特に有名でみごとなもの、アメリカのイエローストーン国立公園のマンモスホットスプリングや、数年前にマイルドセブンの広告で使われたトルコのパムッカレなどで見ることが出来ます。

この石灰華段丘は、石灰

分を多く含んだ水が傾斜のある場所を流れるとき、石灰分を畦状に沈澱させて作る、傾斜地の段々になった田圃のような地形なのです。畦の部分はリムストーンといい、次第に高くなります。では、なぜこの階段に石灰華段丘が出来たのでしょうか。

階段の両側の壁を見てください。セメントがむき出しになっています。ここにポイントがあります。セメントの主な原料は石灰岩です。雨水がセメントを溶かし、そのセメントの石灰分が沈澱するのです。この石灰華段丘は、少しずつ成長し続けているようです。

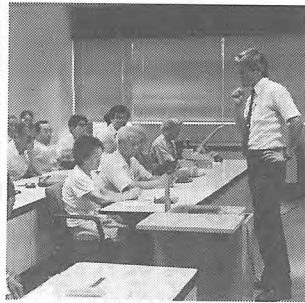


階段下の石灰華段丘

(青山高校教諭 柴田 徹)

講演と映画の会

九月二日、当センター職員千野裕道による講演「縄文以前の森と人」と、映画「又鬼またぎ」を上映する会が、当センター会議室で開かれました。当日は都内をはじめ近隣の神奈川県などから146名の参加がありました。



講演会

平成元年度の安全衛生行事

七月三日 七月一日から始まった全国安全週間中に、当センターの事務所・鹿島整理場と全遺跡現場で「安全の日」の行事が行われ、「安全標語」入選作品の発表などが行われました。

安全標語は応募者392名・498句の中から6句の標語が選ばれました。

一等「近道のベルコン横断事故の道」 田平多美子

二等「安全は優れた調査の第一歩」 山本 孝司

「残すのは無事故の記録と祖先の記録」 下村真佐子

三等「たかめよう遺跡の知識と安全意識」 井草 孝子

「遺跡の発見 危険予知眼から耳からゆとりから」

寺本 健

「大きな事故の始まりは慣れた作業と気のゆるみ」

前田紀代子

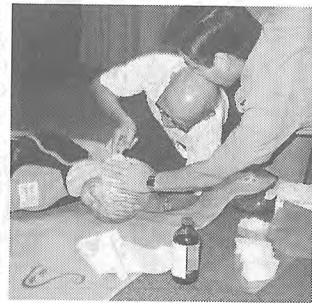
七月十五日 多摩消防署救急隊員の指導により、三角巾の使い方や人工呼吸など、応急手当てについての救急法講習会が行われました。

七月二十・二十一日 中災防の小池安全管理士により、遺跡現場及び整理場の安全診断が行われ、安全衛生についての指導を受けました。

十月二十一日 多摩中央警察署交通課の指導により、交通安全についての講習を受けました。十二月の交通安全キャンペーンは、「そ

の一杯 断る勇気が事故を断つ」です。

外国人研究者の来所



救急法の実習

六月二十四日 フランス国立ラザレ先史学研究所長の

アニー・エシャソー博士。

八月三日 ソウル大学の李鮮馥せんぷく博士。

八月十七・十八・二十一日 アメリカのスミスソニアン研究機構からペメラ・バンデ

イパー博士。

来所された各研究者と職員との意見交換を通じて、国際交流が図られました。

縄文土器作り教室

第四回目の土器作り教室が十月二十一・二十二日の二日間、当センターで開かれました。当日は約80名の応募者の中から抽選で選ば

れた30名の「にわか縄文人」が、熱心に土器作りに挑戦しました。なお、土器焼きは十一月十八日の予定ですが、はたして作品の出来栄えのほどは如何に：。



縄文土器作り教室

トピックス

◎平成元年度職員研究助成・海外研修が七月三日に次のとおり決定しました。

◎職員研究助成 「保存処理方法の比較研究と経年変化の実態調査」 上條朝宏・松崎元樹・竹花宏之

「当センターにおける写真(ネガ・ポジ)の最良の保存方法について」 白井悦郎・関 憲弘・野村孝之

◎海外研修 千野裕道、江里口省三・武笠多恵子

◎文部省科学研究奨励研究

Bが、佐藤 攻・長佐古真也に交付されました。

◎第三回「多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム」武士の発生(馬と鉄)を平成二年二月三日(土)にパルテノン多摩で開催する予定ですので奮って御参加下さい。

全埋協の行事

八月二十九日 「日本列島発掘展」が終了しました。

昭和六十三年八月の大坂展から始まり、全国十三会場で約十六万人の見学者がありました。

九月七日 愛媛県で全埋協研修会が開かれました。

十月二十日 千葉市で全埋協関東ブロック会議が開催されました。



発行

財団法人 東京都教育文化財団
財団法人 東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2

☎ 0423-73-5296

0423-74-8044

平成元年10月31日